

ミスター・ブルームとユダヤ人問題

中 尾 真 理*

Mr Bloom and His Jewish Identity

Mari NAKAO

要 旨

『ユリシーズ』の主人公レオポルド・ブルームは語り手からミスター・ブルームと呼ばれている。これはもう一人の主人公スティーヴンが語り手から常にスティーヴンと呼ばれ、その他の登場人物たち、サイモン・ディーダラスやマーティン・カニンガムがサイモンやマーティン・カニンガムと親しみをこめて呼ばれているのと比べ、扱いが違うように思われる。そのブルーム氏はユダヤ人である。本論ではダブリンの男性社会からどことなく浮き上がった存在である「ブルーム氏」を取り上げ、その孤立の原因として彼の「ユダヤ人問題」がどの程度、関係しているかという点について検討する。ブルームのユダヤ人としての生い立ち、当時のユダヤ人をめぐる社会背景、周囲の人々がブルームをどのように受けとめているか、17章でスティーヴンが歌うユダヤ人排撃の歌の意味などを順に考察し、ブルーム氏の孤立の本当の意味と、「ブルーム氏」という敬称に込められた作者の意図を明らかにしたい。

(一) Mr Bloom

レオポルド・ブルーム氏は美味しそうに獣や鳥の内臓を食べた。(4・1-2)⁽¹⁾

このような語り出しでレオポルド・ブルーム (Leopold Bloom) は『ユリシーズ』(*Ulysses*) という小説に登場してくる。以後、語り手はほぼ一貫して彼のことを「ミスター・ブルーム」(Mr Bloom) と呼び続ける。「ブルーム氏」は4章から登場し、1章から登場しているもう一人の主人公スティーヴン (Stephen) を圧倒しかねない存在感で、4章 (エクレス街の自宅)、5章 (市街)、6章 (墓地) を独り占めし、7章 (新聞社) に出入りをし、8章 (市街) でまたフル出演し、9章 (国立図書館) にも顔を出し、アイルランド総督の騎馬行列のある10章でも姿を見せしている。11章 (オーモンド・ホテル) でも彼は重要な存在であり、13章 (浜辺) も後半は彼の一人舞台である。11章以後は叙述のスタイルも手が込んでくる。また、一方でスティーヴンの存在も彼に劣らず大きくなるが、14章 (産科病院)、15章 (夜の街)、16章 (御者溜まり)、17章 (エクレス街のブルームの家) とブルームが重要な中心人物であることに変わりない。ただ語りスタイルが複雑になるにつれて主人公ブルームの呼び方は変化する。なにしろこの作品は、章ごと

の語り (narration) に工夫がこらされ、さながら文体の実験室のようであるのだから。勿論、章ごとに変わる語り手の特質によって呼び方が変わることは考慮しなければならない。7章は新聞記事風、10章はフラッシュバックの手法を取り入れた断章の寄せ集め、12章は名前のない「Nameless One (名無しの権兵衛)」という人物による一人称の語り、13章前半部はガーティ・マクダウェル (Gerty MacDowell) という少女の意識に焦点をあてた3人称の語りである。さらに、14章は古今の散文作家の文体を模したパロディ風の語り、15章は戯曲形式、17章は教義問答形式で書かれている。人物の呼び方もそれぞれの「語り手」に合わせた呼び方で呼ばれるのは当然だ。例えば、借金の取立てをしている「Nameless One」の「俺」が一人称で語る12章では、ブルームは「ブルーム」と呼び捨てである。酒を飲ませてくれそうもないブルームを「俺 (I)」が「ブルーム氏」などと呼ぶはずもない。16章は、文体が回りくどいものの、3人称形式の、視点をほぼブルームの意識に合わせた客観的な語りだが、ここではブルームも何故か「ブルーム」であって、「ブルーム氏」とは呼ばれない。16章と続く17章ではスティーヴンは「スティーヴン」、ブルームは「ブルーム」で、「ミスター・ブルーム」とは呼ばれていない。最終章18章 (寝室) はモリーの独白にあてられていて、ブルームはここでは名前では呼ばれず、ほかの男性と同じくただ「彼 (he)」と呼ばれるだけである。だが、それ以外の章、つまり4, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 13, 14章では、彼はだいたいにおいて語り手から「ミスター・ブルーム」と呼ばれるのであって、ブルームとかレオポルドとは呼ばれないのである。これは他の登場人物、スティーヴンや、ボイラン (Boylan)、マリガン (Mulligan) やサイモン・ディーダラス (Simon Dedalus) が語り手から、登場人物同士の場合と同じように、スティーヴン、ボイラン、マリガン、サイモン・ディーダラスなどと呼ばれているのとは少し違うように思われる。

小説の登場人物が「Mr ——」と呼ばれるのは、18世紀以来小説のconventionともいうもので、珍しくもないが、20世紀になると事情も違ってくる。特に『ユリシーズ』の場合、もう一人の主人公スティーヴンは、いつも「スティーヴン」である。他の登場人物もレネハン (Lenahan) やマッコイ (M'Coy) など、多くは敬称なし、ファミリー・ネームのみの呼び捨てである。或いは「J. J. オモロイ (J. J. O'Molloy)」、「ベン・ドラード (Ben Dollard)」のように、「ファミリー・ネーム」に「ファースト・ネーム」を冠して呼ぶことが多い。場合に応じてディグナム (Dignam) と呼んだり、パディ・ディグナム (Paddy Dignam) と呼んでみたり、一定しない場合も少なくない。

中には「バック (牡鹿、伊達男)・マリガン (Buck Mulligan)」、「ブレイゼズ (地獄の)・ボイラン (Blazes Boylan)」のようにあだ名を冠して呼ばれる場合もある。登場人物同士でそう呼ぶのはともかく、語り手があだ名つきで呼ぶのは評価が決まっている場合が多い。マリガンもボイランもスティーヴンとブルームが否定したがっている人物である。

ブルーム以外に、語り手からMrの敬称つきで呼ばれているのは、ディージー校長 (Mr Deasy)、サイモン・ディーダラス、ジャック・パワー (Jack Power)、トム・カーナン (Tom Kernan) などごく少数の人物である。サイモン・ディーダラスの場合、息子のスティーヴンと区別する必要があるので、「ディーダラス氏」と呼ばれるのは当然だ。だが、おちぶれてはいるが、彼が「年配」の「紳士」であることも「ディーダラス氏」と呼ばれる大きな理由になっていると思われる。

「ブルーム氏」の場合も、38歳という年齢がそうさせるのだろうか。年齢だけでなく、ブルーム氏は名実ともに「紳士」であると認められているのだろうか。

「ディージー氏」と「パワー氏」の場合は「校長」と「ダブリン警察管区の治安官」という社会的地位に敬意を表したものと考えられる。ただ、例外はマーティン・カニンガム (Martin Cunningham) で、アイルランド政庁の役人という比較的高い地位にありながら、彼だけは決して語り手からミスター・カニンガムとは呼ばれない。いつもマーティン・カニンガムである。彼の場合は特別なのだろうか。

紅茶商トム・カーナンの場合には少々ニュアンスが違う。彼は「Mr ——」と呼ばれるにふさわしい年齢で、かつてはいい生活をしてきたことから、語り手が敬愛の気持ちをこめて「ミスター・カーナン」と呼ぶのだとも考えられるが、その口調にはやや皮肉な調子がこもっているように思われる。ご存知のように、「カーナン氏」は「ダブリン市民 (Dubliners)」の「恩寵 ("Grace")」に出てくる人物で、そこではマーティン・カニンガム (「恩寵」ではカニンガム氏と呼ばれている) やジャック・パワーらが彼の飲酒癖をやめさせようとする話が描かれている。トム・カーナンは紅茶の鑑定士兼販売員だが、仕事に関しては独特の古い考えを持っており、必要以上に服装に気を遣う。シルクハットとゲートルを身につけ、その「紳士然」とした服装で顧客の信用を保とうとしているのだ。そのような彼を語り手が「カーナン氏」と呼ぶのは、大袈裟な服装や彼の頑固さ、その裏に潜む人間的な弱さ (飲酒癖) への揶揄がこめられていると考えられる。

このように、多少のニュアンスの違いはあるが、語り手から敬称つきで呼ばれる人物はこの作品では実は限られており、ブルームはその数少ない一人である。では、「ブルーム氏」にはどのような意味がこめられているのだろうか。

(二) 孤独なブルーム

語り手からは「ミスター・ブルーム」と呼ばれるブルームだが、他の登場人物からはどう呼ばれているのだろうか。

ブルームは仲間うちでは敬称抜きで「ブルーム」と呼ばれている。このように敬称ぬき、ファミリー・ネームで呼び合うのは男性同士のごく当たり前の習慣で、一般的な呼び方である。だが、その場合でも親しい間柄では、サイモンとか、マーティンと呼ぶのが普通で、現にサイモン・デーダラスやマーティン・カニンガムは仲間からしばしばそう呼ばれている。ところが、ブルームだけは例外で、誰も彼のことをレオ (Leo) とかレオポルドとは呼ばない。それどころか、同じ新聞社に勤める同僚で、ブルームから三シリングのお金を借りていさえするジョー・ハインズ (Joe Hynes) (ただし、こちらは新聞記者である) はブルームのファースト・ネームを知らず、墓地で「君の洗礼名は何だった？よく知らないのだけど (I'm not sure.)」(6・880-1) などと言っている。

勿論、妻のモリー (Molly) は彼をポールディー (Poldy) と呼んでいるが、彼の知人や仕事仲間にはブルームをファースト・ネームで呼ぶことはなく、中にはその名前さえよく知らない者もいる。これは彼等がブルームとそれほど親しいわけではなく、通り一遍の付き合いでしかないこ

とを示しているのではないだろうか。いや、そもそも、いったい、ブルームには友人や仲間などと言うものがあるのだろうか。仕事仲間といっても、独立自営業に近い広告取り (canvasser) には、厳密な意味での同僚はおらず、知人は多いものの、特に親しい友人は登場してこない。総じて彼らはブルームのことをよく知らず、ブルームやその妻モリーについては情報通のマーティン・カニングムに注意されたり、お互いに問い合わせたりしている。時には妻のモリーの方がよく知られていて、ブルームはマダム・マリオン・トゥイーディー (Madame Marion Tweedy) の夫として思い出されることもある。例えば弁護士のジョージ・ヘンリー・メントン (George Henry Menton) の場合のように (6・693-4)。数人が居合わせている場面で、ブルームが席をはずすとたちまち彼について噂や憶測が飛び交う場面が何度か見られるが、要はブルームがダブリンではその程度にしか知られていない人物、或いは、その程度の注意しか引かない人物ということなのである。

(三) ミスター・ブルームとは何者か

ブルームは38歳、既に家を出た娘もある身で、22歳のスティーヴンに比べれば、中年の域に達していると言ってよい。職業はフリーマンズ・ジャーナル (the *Freeman's Journal*) 紙の広告取りである。無職のサイモン・ディーダラスや競馬の予想をしているレネハンなどに比べれば立派な職業人と言えるが、これまでに何回も職業を変えている。広告取りの仕事も新聞社の正式な社員として新聞社内に決まったデスクがあるわけではなく、収入は取り付けた広告に応じての歩合制である (8・1057-8 参照)。7章では彼の勤める新聞社フリーマンズ・ジャーナル社が描かれているが、忙しげに出入りするブルームもそこでは一向に重要な人物とは見られておらず、編集長のマイルズ・クロフォード (Myles Crawford) の対応もそっけないものである。

実際、ブルームはどこに行っても歓迎されてはいない。ディグナムの葬式に出席し、新聞広告の仕事の交渉をする以外に、彼は歩き回り、知り合いに挨拶をし、入浴をし、買い物などの用事を済ませる。好奇心が強く、話し好きで、12章で「名無し」の語り手が煩がっているように、どこでも議論に首を突っ込む癖がある。それにもかかわらず、(あるいはそれ故に) ブルームはいつも一人であり、周りの者は彼を見知ってはいるが、良くは知らないのが、しばしば蔭で彼のことを尋ねる質問が出されることになる。例えば、昼食に立ち寄ったパブでは、亭主のデイヴィー・バーン (Davy Byrne) がノージー・フリン (Nosey Flynn) (パブの常連) にブルームのことをこう尋ねている。

——これはいったい、何をやっている人なのですかね。保険の方じゃなかったですか？

(8・939)

芸術家を目指しながら、世間では芸術家として認められず、孤独に悩む若いスティーヴンに対し、ブルームはすでに家族を持ち、一家を構えて立派に「市民」生活を送っているはずである。ブルームの生活よりは裕福とは言えなくても決して貧しいものではなく、8章での昼食の取りよ

う、18章での暮し振りからみても彼がブルジョア志向であることは間違いない。だが、どうもダブリンの仲間うちでの評価や認識の度合いから言えば、ブルームがダブリンの立派な市民、「ミスター・ブルーム」と呼ばれるにふさわしい存在かどうかは疑問である。

(四) ユダヤ人ブルーム

ブルームはユダヤ人である。そのことが分かるのは4章の半ば、豚の腎臓を買いに行ったドルーゴッシュ (Moses Dlugacz) という精肉店で「こいつ、そう (ユダヤ人) だと思ったよ」と思うところ以下 (4・156、4・186-7) で読者に示される。ユダヤ人問題については、ブルームが登場しない場面でも、早くも1章から言及があり、同じことは2章でも繰り返されて、4章以後に継承されている。最初の言及 (1章) はイギリス人のハインズ (Haines) が「勿論、僕は英国人です……実際、そのように感じてもありますよ。僕は自分の国がドイツ系ユダヤ人の思うままになるのを見たくはありません」(1・666-7) と言うところである。2章ではイギリスびいきのディージー校長が、「イングランドはユダヤ人に牛耳られている……やつらがいると国民は衰亡してしまう……ユダヤ人商人がすでに破壊の仕事にとりかかっていることは火を見るより明らかだ……」(2・346-51) と言っている。これらはどちらもユダヤ人への偏見に基づく愛国主義的な (ただし、この場合は英国寄りの) 発言で、このような偏見に基づいたユダヤ人排斥論はこの後しばしば、いろいろな人物の口から発せられる。例えば、6章の墓地へ行く馬車の中で、マーティン・カニンガムはルーベン・J・ドッド (Reuben J. Dodd) が歩いている姿を見かけて次のように言う。

「ルーベンの一族の出だ」(6・251)

旧約聖書ではルーベンはヤコブの息子で、ここでは高利貸しのユダヤ人を指している。サイモン・ディーダラスは彼に借金の取立てをくらったことがあるので、「悪魔がお前の背中の掛け金をへし折ってくればいいのに」(6・256) と、憎しみを露わにする。「僕らはみんなあそこに行ったことがあるのさ」(6・259) とマーティン・カニンガムは言い、そばにブルームがいるのに気づいてあわてて「まあ、僕らのほとんどは、だ」と言いなおす (6・261)。ここでブルームは突然、ルーベン・J・ドッドが息子の命を助けてもらった際に、はしなくも「マルタ島のユダヤ人」的本性をさらけ出すという小話を始める。気まずい空気を和らげようというブルームの努力がうかがえる場面だ。

また、スティーヴンの友人で医学生のマリガンは、図書館にやってきたブルームの気配を聞きつけて次のように叫んでいる。

——ユダ公だ (sheeny) ! バック・マリガンは叫んだ。

彼は跳びあがって名刺をひつつかんだ。

——なんていう名前? アイキー・モーゼス? ブルームか。(9・605-7)

アイキー (Ikey) というのはアイザック (Isaac) の略で、モーゼス (Moses) とともにユダヤ人に多い名前だ、これでユダヤ人の蔑称になる。マリガンはスティーヴンにこう警告する。

——さ迷えるユダヤ人だ、バック・マリガンは畏まった道化のように囁いた。奴の目を見たか？好色そうにお前を見ていたよ。お前の身が心配だ、老水夫よ。おお、キンチ (Kinch)、お前の身に危険が迫っている。いしき宛てを用意するんだな。(9・1209-1211)

実は、このときが、この日、スティーヴンとブルームの直接に接触する最初の機会であったのだが、スティーヴンはぼんやりしていてブルームに気が付かない。ブルームの方ではすれ違いざまに会釈と挨拶をし、マリガンがそれに答えるのだが、その後でスティーヴンに上のような偏見に満ちた言葉を囁くのである。

『ユリシーズ』は解き明かすのが困難なほど、さまざまな意図や仕掛けが盛り込まれた作品である。ジョイスは『ユリシーズ』の執筆に当たって、まず『若き芸術家の肖像 (A Portrait of the Artist as a Young Man)』(1904-6年執筆)の主人公スティーヴン・ディーダラスをそのまま主人公として登場させ、作品の舞台をダブリン、日時は1904年6月16日と設定した。1904年は作者のジョイス自身がスティーヴンと同じ年齢、22歳であった年で、彼が後に妻となる女性(ノラ)と一緒にイタリアに職を求めてダブリンを出た年でもある。1904年は作者が青年から大人になった年、スティーヴンがブルームに変貌する記念の年だったと言えるだろう。

また、登場人物には『ダブリン市民』(1904-14年執筆)で描いた人物を幾人か再登場させている。さらに4章からはレオポルド・ブルームというもうひとりの主人公を登場させたが、これが『ユリシーズ』と言う作品の性格を決定づけることになった。ブルーム氏の登場は『ユリシーズ』(1914-22年執筆)執筆当時の作者の年齢、32歳から40歳、に近づけたものであり、また、『若き芸術家の肖像』で扱った主題を新たに発展させるためでもあった。文学青年スティーヴンに対し、レオポルド・ブルームはその父親に近いくらいの年齢で、スティーヴンと同じアイルランド生まれのダブリン育ちだが、若く未完成なスティーヴンに対し、ブルームは成熟した男性、しかも「あらゆる要素を身に付けた人間 (all round man)」として創造されている。つまり、息子でしかないスティーヴンに対し、ブルームは父であり、息子であり、夫であり、恋人でもあるというわけである。今は新聞社の広告取りだが、これまでに小間物の行商を始めいくつもの職業を経験している。以上は勿論、西洋文学の古典である『オデュッセイア (The Odyssey)』の中の父であり、夫であり、恋人であり、戦う人であり、智慧の人であり、王でもあるオデュッセウス (Odysseus) 像を下敷きにしての。⁽²⁾ 大英帝国統治下のアイルランド人ということで、英語を話す英国国民として、カトリックの伝統の根強いアイルランド文化の中に生きるという、歴史の皮肉に立ち向かわざるをえない点では、彼もスティーヴンと同じ立場である。だが、これらの属性に加えて、ブルームにはさらにユダヤ人という属性が付加されている。すなわち、カトリックの信仰を捨てたスティーヴンに対し、ブルームは改宗ユダヤ人という設定なのである。では、このユダヤ人であるということは、「ブルーム氏」にどのような意味を与えているだろうか。

(五) ダブリンとユダヤ人

その前に、1904年のダブリンにおけるユダヤ人の状況を整理してみよう。

ユダヤ人が差別され、追放され、流転の民として苦闘してきた民族であることはいまさら言うまでもない。ただ、イギリスではユダヤ人差別は比較的穏やかで、迫害も大陸諸国に比べればまだしも少ないほうであったという。⁽³⁾ イギリス統治下にあったアイルランドでも事情は変わらないと考えて差し支えないだろう。本作品中にも、デージー校長のように、アイルランドではユダヤ人の移住を認めなかったため、ユダヤ人の迫害もなかったと信じている人のいたことが示されている。勿論、アイルランドにユダヤ人がいなかったというのは間違いで、作者は意図的にこのような発言を取り入れたのだ。なにしろ、このデージー校長の言葉をあざ笑うかのようにその2章あとで、ユダヤ人レオポルド・ブルーム氏が登場するのだから。

実際には、英国にもアイルランドにも、ユダヤ人は存在し、ユダヤ人の迫害もあった。中世にも迫害事件はあったが、近いところでは1904年、アイルランドのリメリック (Limerick) で、ジョン・クレイ (Father John Creagh) という聖職者がユダヤ人排斥運動を起こしている。1904年といえば、『ユリシーズ』の設定と同じ年、ジョイスが執筆を始める、ちょうど十年前のことである。実は、ヨーロッパではその少し以前、1880年代から1910年代にかけて、東ヨーロッパからユダヤ人が大量に移住するという現象が起きていた。⁽⁴⁾ イギリスも (また、その一部であったアイルランドでも) その例にもれなかったのだが、この大量移住は各国でさまざまな問題を引き起こし、反ユダヤ主義が生まれていた。ジョイスはそうした時代の空気を敏感に感じ取っていたのだ。⁽⁵⁾

もともと、ヨーロッパのどの国の歴史においても、ユダヤ人はキリスト教徒の敵とみなされてきた。ユダヤ人は儀式殺人を行うという言われのない告発が、中世以来、繰り返されてきたのは歴史上の事実である。儀式殺人とは、ユダヤ人がキリストを冒瀆するために、キリスト教徒の幼子を誘拐し、磔刑にして殺すというものである。古くは1144年のノリッジの事件、1255年のリンカン (Lincoln) の少年ヒュー (Hugh) の事件がある。⁽⁶⁾

1904年にアイルランドのリメリックで起きた事件も、中世以来の偏見を引きずった事件のひとつだった。その背景が1880年代から1910年代にかけて東欧系ユダヤ人が大量に英国内に流入したという事実にあったことは前に述べた。流入したユダヤ人は都市周辺の農村を巡回する行商人になるか、あるいは都市部に住み、同邦の行商人に商品を提供する小商店主となるのが普通だった。第一次大戦でそれまでの大量流入が事実上、阻止されるまでの30年ほどの間、アイルランドではこれまでにユダヤ人が住み着き、急激な社会現象にもなう経済の混乱と中世以来の宗教的偏見が一緒になって、地元住民との間で摩擦が生じユダヤ人排斥運動に発展したのである。

こうした時事的なユダヤ人問題を、作者はかなり意図的にこの作品に組み入れたと考えられる。ルーベン・J・ドッドという強欲な金貸しのユダヤ人の姿を6章で示したのも、一般の人々の意識の中に染み着いている、ユダヤ人＝シャイロックという固定観念を再確認するためと考えられる。従ってブルームがなんとなく仲間うちから胡散臭い目で見られているのも、ユダヤ人への偏見に基づいていると考えても間違いとは言えないのである。中でも、言われ無き偏見はマリガン

やディージー校長のような上層中流階級、或いはレネハンや12章の語り手のNameless Oneなど、場末の酒場に入り浸る下層社会の人間ほど激しいようである。スローアウェイ (Throwaway) という競馬馬をめぐって、ブルームがこっそり秘密情報を手に入れて大穴をあてたという間違っただ噂が広まるが、この時、大金が手に入ったのに仲間に酒の一杯もおごらないと憎悪を募らす「市民 (the citizen)」などその典型だろう。彼らとブルームの間には国籍と愛国心をめぐって論争が起こり、「市民」が仲間の暗黙の応援のうちに、ブルーム目掛けてビスケットの缶を投げつける乱闘の場面 (12章) は本編の擬似クライマックスとなっているが、2章でディージー校長の間違っただ発言があり、前述のマリガンの偏見に満ちた発言を踏まえたうえで、そのような作品構成は作者のこの意図を裏書している。このとき、ブルームは我を忘れて、「お前の神様はユダヤ人だった。キリストは僕と同じようにユダヤ人だったのだ」(12・1808) と叫んでいる。ついでながら、ブルームは競馬には興味も関係もなく、もともと禁酒主義者同然で余り酒を飲みたがらない、という裏の事情を知っている読者にとっては、このエピソードは滑稽でもあるし、また、言われ無き偏見の被害者ブルームに同情もするのである。

(六) ユダヤ人ブルームとダブリンの男性たち

12章でブルームは偏狭な愛国者「市民」に「お前さんの国籍はどこか尋ねてもいいかな」と聞かれて、「アイルランドです。私はここで生まれました。アイルランドで」(12・1431) と答えている。ブルームの祖父はハンガリー生まれのユダヤ人だが、父ルドルフ (Rudolph) がクランブラッシル通り (Clanbrassil Street) (ユダヤ人地区) に住んでいた時に、名前をヴィラグ (Virag) からブルーム (どちらも花の意味) に変えている (17・1869-72)。父ルドルフ (旧姓ヴィラグ) はこの時、「ユダヤ人の間にキリスト教を広める協会」の世話で、ユダヤ教から英国国教会、すなわち、プロテスタントに改宗している (17・1635-40)。従って、ブルームは誕生時にはプロテスタントとして洗礼を受けているわけである。一方、母親のエレン (Ellen) は旧姓をヒギンズ (Higgins) と言い、ユダヤ人であった可能性は低いと思われる (エレンの父親 Julius Higgins は Karoly から改名しているので、ハンガリア系ユダヤ人であった可能性がある。ただしエレンの母親は旧姓 Hegarty でこれは英国人の名前である。⁷⁾ ユダヤ人の律法によると母親の血統が重視されるということなので、宗教的にもまた血統的にも、ブルームが完全にユダヤ人であるとは断言しにくい。ただ、改宗ユダヤ人の子供であると言えるだけである。現に彼は割礼も受けていないし、聖別された肉しか口にしないなどのユダヤ教の戒律や習慣も守っていない。したがって生活文化的にもブルームはユダヤ人とは言えないのである。

ブルームはクランブラッシル通りで生まれ、高校を卒業すると、家業の小間物を商う行商の仕事に就いた (14・1045以下)。その後、ブルームはモリーと結婚する時にカトリックに改宗し、現在に至っているが、カトリックの礼拝のしきたりなどは良く知らず、宗教的には現代的な知識人らしく、懐疑的かつ寛容である。このようにブルームが本当の意味でユダヤ人と言えるかどうかは曖昧で、彼の国籍については彼自身がいう通り、「アイルランドです。私はここで生まれました。アイルランドで」というより仕方がないと言える。また、4章から17章までのブルームに

関する部分を読んでも、読者はブルームがユダヤ人の出自にことさら屈折した感情を持っているという印象は受けない。ロバート・マーティン・アダムズ (Robert Martin Adams) が言うように、むしろブルームはブルジョア風であり、インターナショナルな人間に見える。⁽⁸⁾ なによりも彼は立派にダブリン市民の一員になりきっている。それほどダブリンの街を歩く彼は、心底ダブリンに溶け込んでいるように思われるのだ。

問題なのはブルーム自身がどう意識していようと、周囲の人が彼をどう見ているかである。彼らの反応を見る前に、まずブルームの経歴をもう一度振り返ってみよう。

ブルームの生まれたクランブラッシル通りはユダヤ人地区である。

父ルドルフ (ユダヤ人) はハンガリーからウィーン、ミラノ、フィレンツェ、ロンドンを経てダブリンにやってくる。ブルームが生まれたのは1866年なので、ルドルフがダブリンに来たのはそれ以前ということになるが、17章のブルームの机の引出しの写真から、1852年にはルドルフとその父親レオポルドがハンガリーにいたことがわかっている (17・1875以下参照)。おそらく、ルドルフ・ヴィラーグは父親と写真を撮ったあと、1852年に故郷を出たのだろう。ダブリンでは伝統的なユダヤ人の職業、つまり古着、装身具、小間物の行商をし、そのうちに同邦の行商人に商品を供給する商店の経営するようになったと考えられる。⁽⁹⁾ ブルームが高校卒業後に従事した小間物の行商は、父親の店の商品を販売する仕事であったと推察される。その後、ルドルフは70歳の時に、ダブリンから遠い地方都市エニス (Ennis) で、自分の所有していたホテルで服毒自殺しているが、そのホテルというのはユダヤ人の行商人に特別の便宜を提供する「旅籠」であったと推察される。半定住の行商人たちはそうしたホテルに泊まって仕事に励み、資金を蓄え、定住の小売店主に上昇できるようにつとめるものだからである。また、ブルームの妻のモリーは母親がスペイン系のユダヤ人で、自分も「ユダヤ人のような」容貌をしていると述べている (18・1184)。彼女と結婚するためにブルームはカトリックに改宗しているが、前にも述べたように、これはまったく便宜上の改宗だったと思われる。二人は結婚後五年ばかりはプレザンツ通り (Pleasants street) に住み、その後、ロンバード通り西 (Lombard street west)、レイモンド・テラス (Raymond terrace) に移り住んだ。いずれもユダヤ人地区である。⁽¹⁰⁾ プレザンツ通りに居たときにはウィズダム・ヒーリー文房具店 (Wisdom Hely's) で吸い取り紙の行商を行っている (6・703、8・158)。ロンバード通り西時代にはトムの印刷所に勤めており (7・224、8・157)、また、シティ・アームズ・ホテル (City Arms hotel) 時代の1893年には、ジョージ・カフ (George Cuff) 家畜商の書記として働いたが、まもなく解雇されている (17・484-6、18・1223-5)。この年の翌1894年1月9日には生後11日目の息子ルーディ (Rudy) の死という出来事があり、経済的にも精神的にも苦しい時期だった (11・485)。その後、現在の新聞社の仕事についたというわけである。その間、ケレット服地店 (Kellet's) の通信販売部で働いていたことや (15・2806)、ドリミーという保険会社 (Drimmie's) で働いていたこともあるらしいが (8・939-40、13・845、18・1112、18・1223-5)、これらについてはモリーの、みんなブルームがしくじってしまったという回想があるのみで、何故辞めることになったのかはよくわからない。ただ、原因がブルームの側にあったらしいことが推察されるだけである。また、1893年には違法な「ハンガリー王室御用達の富籤」の販売にかかわって逮捕されそうになったこともある (8・

185、12・775-79)。仕事に関する限りブルームの経歴は、模範的市民のそれとして自慢できるものではないようだ。

ブルームは4章で登場して以来、ダブリンの町を歩き、友人のお葬式に参列して墓地に行き、キーズ (Keyes) の店から広告の仕事を取り付けるために新聞社や図書館を駆け回り、その間に二度食事をし、その間多くの男たちに会うが、このように時間に拘束されない一日を送れるのは、彼が広告取りという外交の仕事に従事しているからだだろう。新聞社の広告取りという仕事は、マーティン・カニングムのお役所勤めやジョン・ヘンリー・メントンのような弁護士に比べれば、決して社会的地位が高いとは言えない。それでもれっきとした「市民」の仕事であると言う点では、零細な小間物の行商に比べて、大きく違っている。ユダヤ人の行商人は半定住のアウトサイダーと位置付けられて、なかなか市民とは認知されないからである。一方、ダブリンの街を歩き回るブルームの姿には、マリガンと言うとおり「さ迷えるユダヤ人」の面影があると見ることもできる。ブルームはダブリンの街を自在に歩き回っているが、周囲の人々が彼に異質なものを感じ取っていることは否定できない。例えば、8章でパブの亭主がノージー・フリンに「これはいったい、何をやっている人なのですかね。保険のほうじゃなかったですか？」と尋ねている。このときのノージー・フリンの答えにも、ブルームへの特別な意識が感じられる。彼はブルームが新聞の広告取りをしていると言い、ついでに彼がフリーメイソンであると告げるのである。例によってブルームが本当にフリーメイソンであるかどうかは実はよくわからないのだが、アイルランドではフリーメイソンは親英的と思われ、カトリック教徒から嫌われているという事情を考えあわせれば、ノージー・フリンがブルームに向ける視線には不信感が潜んでいることがわかるだろう。(4)

或いは11章でサイモン・ディーダラスが、ボブ・カウリー (Father Bob Cowley) やベン・ドラードと、ブルームやその妻モリーの噂をしている。ベン・ドラードは昔、ブルームから演奏会に必要な衣装を借りて急場をしのいだことがあった。サイモンは「あの晩は我が友ブルームが便利な存在だったね (11・476)」と述べている。「我が友ブルーム (Our friend Bloom)」という大げさな言い方には、ブルームが実はそれほど親しい「彼らの友」ではないことが仄めかされているように思われる。しかも、彼らはブルームを尋ねて「ホーレス通り (Holles street) 中を捜して」(11・487) その家を訪れたのだ。親友の間柄であれば、ブルームの移転先を知らないはずがない。また、サイモンは「マリオン・ブルーム夫人はあらゆる種類の古着を持っていた」(11・496) と回想するが、古着商といえばユダヤ人の専売特許である。ちょうど失業して生活に困っていたブルーム夫妻は、モリーがコービー・ハウスでピアノを弾く一方で、馴染みの古着の商いにも関わっていたのだろう (11・485-9)。ただし、ベン・ドラードが思い出すように、「彼 (ブルーム) は一文だって受け取ろうとはしなかった」(11・493-4) ののであるが。

このエピソードはサイモン・ディーダラスと彼の仲間たちと、ブルームの関係をよくあらわしているように思われる。ブルームは彼らのさほど親しくない友人であり、また、ユダヤ人的特徴 (古着商) でもって思い出される知人であったわけである。

サイモン・ディーダラスと彼の仲間の中で、最も信頼のおかれているのはマーティン・カニングムである。彼はアイルランド政庁の役人で、情報通でもあり、また人情家 (彼の妻はアル中で

ある)でもあって、たびたび友人たちの苦境を救ってやっている。友人たちは何かというとマーティンを頼りにし(例えば『ダブリン市民』の「恩寵」など)、また彼にはその期待を裏切らないだけの器量もある。ブルームにとっても彼は親切で、墓地では仲間がブルームの父親の自殺に触れないように気を遣い、12章の酒場では「市民」とけんかしたブルームをすばやく馬車で連れ出している。ブルームも彼のことを「同情心のある人情家。知的だし。シェイクスピアの顔に似ている。いつも気の利いたことを言ってくれる(6・343-5)」と考えている。ところが、そのマーティンが12章では、ブルームが席を外したわずかの間に、ジョン・ワイズ(John Wyse)や「市民」たちに聞かれるまま、ブルームがハンガリー出身の「墮落したユダヤ人(He's a perverted Jew.)」(12・1635)であると言い、父親の代で改名をしたことまであっさりと話してしまうのである。これは、いったいどういうことだろう。しかも、アイルランド民族主義独立運動のシン・フェイン党(*Sinn Fein*)にブルームが関係を持っているという噂(12・1574)を肯定し、「当局でもそうつかんでいるよ」(12・1623-5、12・1635-7)と答えている。一見、親切に見えるマーティン・カニンガムでさえ、心底ではブルームに違和感を抱いているのである。

ところで、シン・フェイン党といえば、これに大きな影響力のあったアーサー・グリフィス(Arthur Griffith)は民族主義的な立場から反ユダヤ主義的態度を明確にしていた。従って、本当にブルームがシン・フェイン党と関係があれば、ブルームはユダヤ人でありながら、ユダヤ人を否定するような組織に加担していたと言うことになる。ジョン・ワイズの「何故ユダヤ人は隣のやつのように自分の国を愛することができないのだろうか?」(12・1628)という科白はそこから出てくる。また、マーティンはブルームが、「改宗したユダヤ人(converted Jew)(の息子)」とは言わずに、「墮落したユダヤ人(perverted Jew)」だと述べているが、なるほど戒律を守らないブルームがユダヤ人としては「墮落」しているのは確かだとしても、ユダヤ人を裏切るという意味での「墮落したユダヤ人」ではない。ところが、現実にはブルームが自らの民族に対して忠実でないというこの偽りの情報が、「市民」やNameless One、ジョン・ワイズのような偏狭な愛国主義者たちを刺激し、ビスケッ卜缶を投げつけるという暴力的な行動へと駆り立てていく。

(七) ハリー・ヒューズ坊や(Little Harry Hughes)の歌

12章に続いて、ユダヤ人の問題とスティーヴンとの関係が扱われるのは17章においてである。教義問答のように、すべてが問いと答えで語られるこの章では、ブルームとスティーヴンが一杯のココアを前に向かい合い、それぞれがユダヤとアイルランドの民族(どちらも迫害された民族であることが共通している)を代表する形で、意見の交換をする。それぞれの文字を書いたり、国家を歌ったりして双方の意思の疎通がある程度できあがったところで、スティーヴンはブルームの勧めに応じて次のような歌を歌う。

ハリー・ヒューズ坊やと学校友達	<i>Little Harry Hughes and his schoolfellows all</i>
ボール遊びをしにお外(そと)へ行った	<i>Went out for to play ball.</i>
ハリー坊やが打った最初のボール	<i>And the very first ball Little Harry Hughes played</i>

塀を越えてユダヤ人のお庭に入っていった *He drove it o'er the jew's garden wall.*
 ハリー坊やの二番目のボール *And the very second ball Little Harry Hughes played*
 ユダヤ人の窓を全部割ってしまった。 *He broke the jew's windows all.*

この歌はブルームだけでなく、読者をも動揺させるに充分である。というのも、この「ハリー・ヒューズ坊やの歌」こそ、1255年中世イギリスのリンカンで起こった儀式殺人、少年ヒューの悲劇を歌ったものであるからだ。キリスト教徒の少年ヒューの死体がユダヤ人の家の近くで見られたというこの事件は、チョーサーの「カンタベリー物語 (*The Canterbury Tales*)」の尼僧院長の物語の中にも少年聖者の話として収録されている。さて、この歌の二番は、

するとユダヤの娘がやってきた *Then there came the jew's daughter*
 全身緑づくめの服装で *And she all dressed in green.*
 「戻っておいで、かわいい坊や *"Come back, come back, you pretty little boy,*
 もう一度ボールでお遊びよ」 *And play your ball again."*

次の三番は省略するが、歌は次のように四番と五番で終わっている。

娘は坊やの白百合のような手を取って *She took him by the lilywhite hand*
 玄関ホールからとある小部屋へ *And led him along the hall*
 連れて行った。坊やがいくら叫んでも *Until she led him to a room*
 そこではもう誰にも聞こえない。 *Where none could hear him call.*

娘はポケットからペンナイフを取り出すと *She took a penknife out of her pocket*
 かわいい坊やの首をはねた *And cut off his little head.*
 坊やはもうボールでは遊べない *And now he'll play his ball no more*
 だって坊やは死んだのだから。 *For he lies among the dead.*

この歌はユダヤ人の「儀式殺人 (ritual murder)」を扱った歌で、「見知らぬ隠れ家 (strange habitation)」に住み、ナイフで無邪気なキリスト教徒の少年の命を奪う、不気味な「隠れた異教徒 (secret infidel)」のことを歌っている。リンカンでは、前にも述べたように (本論105頁) 実際にこのような事件が起こり、国王により多くのユダヤ人が厳しく処罰された。だが、何故このようなユダヤ人排撃の歌がここで歌われなければならないのだろうか。ステイーヴンはブルームを「秘密の隠れ家に住」む、「隠れた異教徒」とでも言いたいのだろうか。

この歌の一番を聞いた時の、ブルームの反応は、「まじり気のない (with unmixed feeling) 気持ちで (聞いた)。ユダヤ人である彼は、微笑みながら、喜んで耳を傾け、破れていない台所の窓を見た」(17・810-11) というものだった。余裕を持って聞いている彼の気持ちが「まじり気のない気持ちで (with unmixed feelings) (聞いた)」と言うところに現れている。二番で全身緑

づくめのユダヤの娘が登場すると、ブルームの反応は「複雑な気持ち」(with mixed feeling) (17・830-1) に変わる。そしてステイーヴンが最後まで歌い終わった時の反応は、ブルームの内心の動揺と当惑を明瞭に示すものとなる。即ち、問(117)「何故主人(予定された犠牲者= the victim predestined)は悲しんだか?」、問(118)「何故主人は(いやいやながら、抵抗できずに=reluctant, unresisting)じっとしていたか?」、そして問(119)「何故(秘密の異教徒= secret infidelである)主人は沈黙していたか?」という三つの問答で、ブルームが「悲しみ(sad)」、「じっと(still)」したまま、「沈黙(silent)」していたことが暗示されている。⁽¹²⁾

ハリー・ヒューズの歌をクライマックスとする17章のブルームとステイーヴンの心の動きについては、以前に考察したことがあるので、ここでは省略するが、⁽¹³⁾ 前後の状況から見て、ステイーヴンがことさらにユダヤ人に偏見を抱いていたとは考えられない。この歌の前には両者ともユダヤとアイルランドの文字や国歌を交換し、互いに迫害された民族の犠牲者であることを確認しあっていたのである。だとすれば、ステイーヴンがこのようにユダヤ人の娘に誘いこまれる少年の歌を、ブルームの家(秘密の隠れ家)でわざわざ歌ったのは、別の意味があったことになるが、それは次のように考えられる。つまり、ステイーヴンには彼自身の孤立の悩みがあり、それはブルーム(ステイーヴンにとっては見知らぬ年長の男性)がいくら親身に相談に乗ってくれたとしても、彼自身で解決しなくてはならない問題である。⁽¹⁴⁾ そこで彼は一夜の宿を提供しようというブルームの申し出を断り、世間という荒野へ出て行きたい彼の固い決意を示すために、わざとこのような歌を歌ったのだ。彼はユダヤ人に対して憎悪を抱いていたのではなく、むしろ、「父」のようなブルームを振り切るために、このような歌を歌ったと考えられる。事実、ブルームの連想はこの後、ユダヤ人の問題からそれて、娘ミリーの回想へと移ってゆき、ブルームとステイーヴンはともに星空を見上げ、並んで放尿をし、穏やかに別れを告げるのである。曖昧といえば、曖昧な二人の関係だが、しかし、この不明瞭さこそが二人の関係を言い表しているとも言える。「父」と「子」でもなく、共にアイルランドとユダヤの民族を代表すると言っても、両者とも迫害された民族であるということ以外に、特に共通したものがあるわけではない。文字の比較、国歌の交換などしているが、どちらも自分の民族固有の言語をよく知らずに行っているのだから、滑稽と言え、滑稽である。ハリー・ヒューズの歌は、両者の語らいが大して熱のこもらない、空虚なものであることを示しているにすぎないのだ。

(八) しなやかな想像力

ユダヤ人への偏見があるにしろないにしろ、結局、ステイーヴンは「ハリー・ヒューズの歌」を歌うことによって、その偏見を利用した形で、ブルームとの訣別をつける。2人の人生が将来交わる見込みのないことは問(139)から問(144)に暗示される。

ステイーヴンを見送るブルームはひどく孤独で、わびしげな姿である。二人が別れを告げたと、聖ジョージ教会の鐘が鳴り出し、その鐘の音の連想からブルームは昼間葬送の馬車に同乗した仲間たちのことを思い浮かべる。「マーティン・カニンガム(ベッドの中)、ジャック・パワー(ベッドの中)、サイモン・ディーダラス(ベッドの中)、ネッド・ランバート(ベッドの中)、ト

ム・カーナン（ベッドの中）……」とブルームの「友人たち」が列挙され、最後に、「パディ・ディグナム（墓の中）」（17・1235-41）が来る。

この後には「一人で (alone) ブルームは何を聞いたか」という問 (176) があり、

「一人で (alone) ブルームは何を感じたか」という問 (177) がその後が続く。「一人で (alone)」という言葉が強調される問いかけである。さらに「鐘の音、握手の感触、足音、寂寥感には彼に何を思い出させたか」という問 (178) がその後が続く。

この時、ブルームが思い出すのは「さまざまなやり方で別々の場所で既に故人となった仲間 (companion)」、すなわち、「パーシー・アップジョン（戦死、モッター川）、フィリップ・コリガン（結核、ジャーヴィス通り病院）、マシュー・F・ケイン（事故で溺死、ダブリン湾）……」（17・1249-55）という死者の名前である。これらの問答を通じて、読者はブルームが過去も、現在も未来も、孤独であるだろうと予測がつく。

では、17章は孤独と寂寥感で、終わっているだろうか？ 答えはNoである。ブルームはこの後、家に入り、服を脱いで、一日を振り返り、収支の計算をしてから、モリーのベッドにもぐり込む。留守中に配置を換えられた家具に頭をぶつけるというアクシデントはあるものの、勤勉な疲れた市民のように、まずは平和な眠りにつく。どうしてこのようなことが可能なのだろうか。モリーとボイランの一件があり、彼は一日中そのことで悩んでいたのではなかったのか？ モリーがボイランと関係を持つだろうとブルームが予測し、心を悩ませてきたことは4章以来、明らかである。彼は一日中モリーのことを考えており、反対にボイランについては意識的にその名を口にすることさえ避けてきた。⁽¹⁵⁾ 逢引の時間の4時半を11章のオーモンド・ホテルで迎え、続く12章では彼は動揺の余り、酒場で「市民」たちと珍しく騒動を引き起こしている。それほど興奮していたブルームだったが、その気持ちの整理はどうつけたのだろうか。

17章の後半は居間に戻ったブルームが、平和な眠りにつくまでの様子を127の問答で描いている。室内の調度（彼はモリーとボイランの逢引の痕を仔細に観察する）、本棚に並ぶ本（ここでブルームの知識の全容が明らかになる）、引出しの中身（ブルーム家の内情と財政が開示される）などブルームの内面が、感情を押し殺した教義問答の文体で明らかにされていく。ここで読者に分かるのは「小市民ブルーム」、平和主義者、自制心と理性の人、さまざまな問題を抱えながらもささやかな喜びに慰みを見出す術を心得ている、現実主義者、「ブルーム氏」の姿である。

まったく「ブルーム氏」のしなやかな回復力は驚くばかりだ。彼はまず、ロスチャイルドやロックフェラーのような富豪になった自分を想像する。郊外に田園住宅を購入することを計画し、「ハリス・ツイードの帽子、ゴムまち入りの実用的な庭用長靴をはき、如雨露を持って」園芸や軽いスポーツにいそむ「紳士農業家 (gentleman farmer)」（17・1582-3）になる生活を思い描き、その経済的な裏付けについても、細部に至るまでこまごまと考察する（問209-26）。次に、逆の可能性として、世間にも妻にも捨てられ、よるべのない乞食となって地球の果てまで流浪する惨めな老いた自分の姿を想像して、現在のささやかな幸せを確認する（問251-65）。その途方もない伸縮自在の想像は滑稽でもあり、驚きでもある。それがすべて「寝る前に習慣的に行えば、疲労を軽減し、結果として健全な休息と活力の更新をもたらすから」（17・1754-8）やっているのだと聞かされて読者は呆れるしかない。最後に彼はモリーのベッドに入り、ボイラン

への復讐の可能性についても思いを巡らす（問282-293）。そして「暗くなった太陽と衝突した結果、遊星が一挙に消滅するほどの悲惨さはないから」（17・2180-2）と考え、「窃盗、追いはぎ、児童や動物への虐待・・・（以下全部で31の重大な犯罪が列挙される・筆者）・・・売国行為、変装、脅迫、殺人、故意または計画的な殺害ほどの重罪ではないから・・・」（17・2182-94）などと考えて、結局は復讐をあきらめるのだ。「羨望（envy）」から「嫉妬（jealousy）」、「諦念（abnegation）」から「平静（equanimity）」（17・2155）へと小市民的解決に収束するまでに、思いつく限りの可能性を秤にかけ、想像によって実際の行動の代償とするところは、理性の人ブルームの面目躍如であろう。外では異端視され、家庭にあっては妻からも娘からも孤立しているにもかかわらず、希望を失わずに生きていく「小市民ブルーム氏」のしなやかさには感心せざるをえない。

このような柔軟性、このような回復力は常識人ブルームにこそ似つかわしいものだろう。ステイヴンのように現実を深刻に抱え込むような「芸術家的感性」にはこの軽さは不可能である。ブルジョア志向の——ブルームが夢に思い描くのは英国紳士の勳爵士レオポルド・P・ブルームである（17・1612-5）——ブルーム氏だからこそできることなのだ。ここには、ユダヤ人としての誇りや、アイルランドの伝統を声高に語ろうとするユダヤ人ではなく、一人の個人としての幸福を願う、慎ましくも、慎重な市民「ブルーム氏」の姿がある。その姿は8章でブルームが昼食を食べるパブの亭主デイヴィー・バーンが、ノージー・フリンと交わす会話の中で語られたブルームの印象と重なりあう。

——・・・きちんとした物静かな人ですよ。よくここへ立ち寄られるのを見かけますが、一度だってあの人が——そら、羽目はずすところは見たことがありません（8・976-7）。

「彼を酔っ払わせることは誰にもできない」とノージー・フリンは次のように述べる。

——楽しみも度が過ぎると彼は抜け出してしまうのさ。彼が時計を見るのを見なかった？ ああ、あのとき、君はいなかったんだね。まあ、一杯どうぞと勧めてみるよ、あいつは、まず、時計を引っ張り出して、どのくらい飲むかをみるんだ。あいつは本当に、そうするんだよ。（8・978-81）

「安全な人間っていうのでしょうね（He's a safe man）」とデイヴィー・バーンは相槌を打つ。（8・982）

このブルーム評と、「あいつは悪い奴じゃないよ。・・・友達を喜んで助けることで有名だ。すべきことはする人間だ。ああ、ブルームには長所もいろいろあるよ・・・」（8・983-5）」というノージー・フリンのブルーム評、それに次のレネハンのブルーム評は、おそらく、『ユリシーズ』中でも最も好意的な発言だろう。

——あいつは教養ある、オールラウンドな人間なんだ、ブルームっていうのはさ（He's a cultured allroundman, Bloom is）。彼はまじめな顔で言った。あいつはその辺のつまらない

共有地や、猫の額みたいな人間ではない。(He's not one of your common or garden.) . . .
そうさ . . . ブルームの親父さんには芸術家風なところがあるんだよ。(There's a touch of
the artist about old Bloom.)」(10・581-3)

このように、ブルームには「自制心のある」、「教養のある」紳士と見られる一面もあるのだ。勿論、ブルームの「知識教養」については16章で示される通り、「人生という大学」(17・555-6)を出たにすぎない人間にふさわしい雑学である。それでも、ブルームが知性というものに尊敬を払い、自らも理性的で、知識人らしく、紳士的に振舞おうとしている点は認めなければならないだろう。妻のモリーでさえ、ボイランと比較して、夫のそうした長所は認めており、特に彼の知性的で温和なところが、野獣のようなボイランにはない長所だと考えている。動物にやさしく、女性や障害者(盲人)には特に親切で紳士的にふるまうブルームをモリーやブリン夫人、リオーダン夫人など女性はむしろ好意的に受け止めている。問題は男性たちのブルームへの評価である。ノージー・フリンやデイヴィー・バーンが描く「羽目をはずさない(never . . . over the line)」、「きちんとして物静かな人(decent quiet man)」、「安全な人(safe man)」という性格は、生憎、サイモン・ディーグラスや、C.P.マッコイ以下、ダブリンの多くの男性には見られないものなのだ。これがブルームをして彼らから遠ざけてきた理由のひとつであったとしても不思議はない。自制心がなく、大酒を飲み、家庭を顧みないというのが、彼らに共通する性格であるからだ。例えば、マッコイを見てみよう。彼はブルームと同様に職業を転々とし、フリーマンズ・ジャーナル紙の広告取りをしていたことがあり、モリーと同様にソプラノの歌手をしている妻もある。マッコイの境遇はブルームのそれによく似ている。だが、彼とブルームとの共通点はそこまでだ。マッコイが職業を転々とした理由は深酒にある。しかも彼は友人の鞆を質に入れたまま返さないというだらしない男でもある。同じ転職を繰り返すにしてもマッコイとブルームでは原因がまったく異なっているのだ。時計を気にしながら、常に「羽目をはずすことのない」ブルームは、取り澄まして(priggish)見えるかもしれないが、職業人としてははるかに有能で、市民としても信頼できる人間である。ところが、墓地でブルームに名前を尋ねた新聞記者のジョー・ハインズは、マッコイの名前がチャーリーであることはちゃんと覚えていたのに、ブルームの名前は知らなかったのである。ハインズにとって、マッコイは仲間だが、ブルームは仲間と認めていないということだろう。

サイモン・ディーグラスや、死んだディグナムを始め、ブルームの噂をする男性たちの多くは、家庭を顧みずに、飲酒に溺れ、だらしない生活を送っているのが現実だ。(ステイーヴンにもその傾向が認められる)その中で、ブルームだけは、慎重で自制心のある、「安全な」勤め人タイプの人間である。ユダヤ人への偏見もあるだろうが、むしろ、そういった性格の違いが、ブルームを男性たちから遠ざけてきた、そのように考えるのが妥当と思われる。ユダヤ人問題はブルームの本質的な孤独にかかわる問題ではないのである。

(結論)

17章が終わり、変幻自在のしなやかな想像力のおかげで、ユダヤ人ブルームは平和な眠りにつ

く。七つの海を航海するシンドバッドのように……この楽天的、かつ喜劇的な結末は最終章(18章) モリーのモノログに引き継がれる。なにしろ、そこではモリーが夫について、欠点も含めいろいろと考察した挙句、結局、情事を持ったボイランの野獣のような男性らしさを否定し、紳士としてより洗練されたブルームを夫として再確認するのであるから。

「あの人にもう一度だけチャンスあげよう」(I'll just give him one more chance) (18・1497-8)、モリーはそう結論づける。ハッピー・エンドではないが、まずは破局を乗り越えた感のある結末である。外では異分子のごとく見られ、家庭にあっても妻からも娘からも孤立している中年男性ブルームだが、それでも彼はめげることなく、明日もダブリンの街を歩いているであろうことが、読者には感じ取れる。このようなブルームは、Mr Bloomと呼ばれるのにふさわしい人物と言えるのではないだろうか。

注

- (1) James Joyce, *Ulysses*. A Critical and Synoptic Edition. Hans Walter Gabler et al ed. (New York & London: Garland, 1986) 以下、このテキストからの引用は括弧内の章番号及び行数によって示す。
- (2) Frank Budgen: *James Joyce and the Making of Ulysses* (Grayson and Grayson, London, 1937), see chap.1.
- (3) 佐藤唯行「英国ユダヤ人」(講談社選書メチエ、1995年) pp.143-6.
- (4) 佐藤唯行「英国ユダヤ人」 pp.218-20.
- (5) Marilyn Reizbaum, *James Joyce and Judaic Other* (Stanford University Press, 1999), chap.5.
- (6) 佐藤唯行「英国ユダヤ人」 pp.74-6.
- (7) 17・536-7及びDon Gifford, *Ulysses Annotated* (University of California Press, 1988) の注参照。
- (8) Robert Martin Adams, *Surface and Symbol* (New York & Oxford University Press, 1962), p.101.
- (9) 17・1906-15、及び『英国ユダヤ人』 pp.202-7参照。
- (10) 結城英雄「『ユリシーズ』の謎を歩く」(集英社、1999年) 第四挿話参照。
- (11) 小川美彦「ユリシーズ百科事典」(英宝社、1997年) pp.351-4.
- (12) 筆者は便宜上、すべての問答に(1)から(308)までの番号を振っている。問(117)(118)(119)はそれぞれ17・838、17・841、17・843にあたる。
- (13) 拙稿「ブルームとスティーヴン——17挿話の別れと一体化の可能性をめぐって」*Joycean Japan* No.9 (日本ジェイムズ・ジョイス協会、1998年) 参照。
- (14) 教義問答の中にはブルームとスティーヴンを意識的に混同し融合しようとしたものが含まれているが(問51, 67, 70など)、二者の同一化の試みは中途半端なまま終わっている。これは二者の同一化が難しいことを示している。
- (15) Paul Schwaber, *Cast of Characters* (Yale University Press, 1999). Paul Schwaberは精神分析医の立場から、妻を性的に満足させられないことに良心の呵責を感じているブルームには、モリーの不貞を阻止することが出来ず、そのことがトラウマとなって彼の一日の行動を意識の下から規定していると述べている。

Mr Bloom and His Jewish Identity

Leopold Bloom, the *Freeman's Journal's* canvasser, walks around Dublin streets, meeting fellow citizens, throwing a word or two but mostly just observing others, thinking all the while of his family. He

seems to be quite enjoying his lot in life. But the one thing that never escapes careful readers' notice is that Bloom, protagonist of *Ulysses*, is isolated from all the other male characters.

Though a somewhat comic and carefree character, Bloom severely suffers from solitude.

He has no friends who are on first-name terms with him. Some of his acquaintances do not know even his first name. Such a neutral presence is quite unusual, for in a small city like Dublin human relationships are close and complicated. Even the narrator (of chapters from 4 to 7, from 9 to 11, and 13) calls him ceremoniously 'Mr Bloom', while he refers to the other male characters less ceremoniously, such as Stephen, Blazes Boylan, or Martin Cunningham. Is it because the narrator pays due regard to Mr Bloom, gentleman? Or does the narrator just ridicule Bloom's priggishness?

This is quite an interesting point to ponder about, for we know that Bloom is not a model gentleman. And he is a Jew.

The aim of this essay is to look over Bloom's Jewish identity and see how Bloom, a gentleman and a Jew, is treated among his fellow men in Dublin. I will also look over the Jewish situation in Ireland in 1904 and the meaning of the anti-Semitic song, 'Little Harry Hughes', which Stephen, another hero of *Ulysses*, sings at a critical moment.